

知る、伝える、そして環となるよろこび

岩槻 邦男
(ひとはく館長)

人と自然の博物館（以下、「ひとはく」と略称します）の定員は56人です。兵庫県民は560万人弱ですから、定員がすべて満たされていたとしても、県民の自然環境に関する生涯学習を支援するためには、館員1人が10万人に対応するという計算になります。学習支援には対面で伝える人と人との触れあいが不可欠ですが、10万人と直接のこころの触れあいを遂げることはきわめて困難です。そこで、ひとはくでは地域研究員や連携活動グループを通じて触れあいの環を波紋のように拡げていく方策の構築を期しています。



「共生のひろば」は、ひとはくといっしょに考え、行動する人たちとの連携を確かめる場です。2月11日の「ひろば」の集まりでは、日ごろの活動の経過や成果が披露され、ひとはくと連携して学びの環を拡げる活動が見事に演出され、意図が着実に実現されつつある現実を描き出しました。

地球の持続性とは、わたしたちの今日の必要のためだけで地球を食い尽くしてしまう愚を犯さずに、わたしたちが現在享受しているのと同じように、子や孫の世代も地球から豊かな資源が得られるように、唯一の地球を安全に維持し続けることを意味します。その地球の持続性のために、今いちばん必要とされるのはどういうことでしょうか。

いうまでもないことですが、政策決定者は正しい地球の持続性を尊ぶ政策を地球規模で策定しなければなりませんし、科学者はその基盤となる科学的知見を提供しなければなりません。しかし、どんなに指導者ががんばっても、描かれた構想を実行するのは地球人すべてであり、すべての市民が事態を正しく認識することができなかつたら、明日の地球を正しく保全する知恵など出て来っこありません。

市民すべてが事態の深刻さを正しく認識するためには、現在の科学が示す現状認識を正しく理解する必要があります。そのためには、すべての人が自然環境に関心を深め、それについての知見を積み上げなければなりません。そのきっかけを、ひとはくでは、すべての人が自然を「知る」意欲をもつことと期待し、どのようにして知る意欲をもつための「驚き」を与えるかを模索しています。

すでに学びの面白さを知った人は、それを周辺の人に伝えることによって楽しさの環を広げることができます。知るよろこびはそれ自体で知る人に幸せを運びます。しかし、知るよろこびを周辺に伝えた時、知った人のよろこびはさらに増幅されるでしょう。また、伝導の環が広がって、知るよろこびを感得した人が数多くなったとき、智を共有する人たちが強い連帯感を抱くようになるでしょう。そういう世界が構築できたら、明日に向けての地球の持続性には期待がもてます。

しかし、理念は容易には実現しないことが多いです。ひとはくの多様な努力のうちにも、豊かに稔るものもありますが、入った力が逸れて空振りになるものもあります。それらのうちで、「共生のひろば」は見事なホームランをかつ飛ばしました。2月11日、ひとはくセミナー室に集合した仲間たちは、終わりの時間が来てもなお、熱気のこもった発表と反応を続けました。

人と自然のかかわりに関心をもち、関心を深めようとする人たちの熱気が、この日のひとはくを熱くしておりました。多分、これから、毎年のように、2月11日には人と自然を考える人たちのために共生のひろばが設定されることでしょう。そして、人と自然を考える環を波紋のように広げていくことでしょう。地球の未来にとって、強力なうねりがここから展開していくことを強く期待します。

実利的に、地球に役立つ視点から語ってきました。しかし、共生のひろばに集まった人たちは、肩肘はって、地球の明日を背負うのはわたしたちだ、と叫んだものではありません。むしろ、空飛ぶ鳥の動き、水中を泳ぐ魚や虫のすがた、もの言わぬ草花たちとの会話などを通じて、自然のうちにすばらしい美と真理を瞥見し、大きな感動を得たことを語り合ったというのが事実でした。わたしたちは、自然と語り合うことによって、自然からさまざまなことを学び、学ぶことによって、知るよろこびを満喫します。学びは、それでお腹がふくれる実利をもたらしてくれるものではありませんが、人だけが知る幸せをもたらす遊びです。自然の中にある神秘に触れる遊びが、人の学びへの意欲をかき立てます。そして、おおきな知的感動をよろこぶことができるのは、未知なるものに挑戦し、自ら学びに没頭した人だけです。2月11日の共生のひろばに満ちていた熱気は、学びによる幸せに酔うことのできた人たちの息づかいだったのでしょう。そして、学びに励起されてはじめて、私たちをとりまく自然環境への関心を深めていたのでしょう。

知り、伝え、そして環となるよろこびが、今日の地球を美しく保ち、明日の地球への持続性を保つ力のきっかけとなることを期待します。



共生のひろば作品発表（2006年2月11日、人と自然の博物館）